

恋のLesson実践編

vol.1

「まつりお姉ちゃんの恋のLesson実践編！なのです！」

「え〜？」

「それはどういう反応なのですか？」

「なんていうかまつりさんは〜、お姉ちゃんってカンジとはちょっと違うかな〜って」

「ほ？どういうことなのですか？」

「違います違います。もっとこう.....まつりさんはお姉ちゃんっていうより先輩ってカンジです」

「それは褒めてるのですか？」

「褒めてますよ〜！」

「まったく。これだから翼ちゃんは...」

「え、何か言いました？」

「ううん。素直で可愛い後輩だなんて思っただけなのですよ？」

「本当ですかあ〜？」

「本当なのです」

「じゃあちゃ〜んと、育ててくださいね？」

vol.2

四人席のテーブル。二人は斜めでも隣でもなく、きっちり向かい合って座っていた。

「じゃあ、今日のテーマを確認するのです。ええっと...彼氏ができた時に、初デートで挙動不審にならないための練習？ちょっと考えた人とお話ししてくるのです」

「まあまあまあ、私がお願いしたんですよ〜！まつりさんならきつといいアドバイスをしてくれるからって！」

「う〜ん...まあもう席についてるし進めるのです。まず大事なのは、会話のテンポと距離感！近すぎると不自然だし遠すぎても壁を感じちゃうのです」

「今くらいだとデートっぽくないですか？」

「対面だと面接感が出ちゃうのです」

「面接？」

「趣味は何ですか、休日は何してますか、弊社を志望した理由は？」

「嫌な初デートですね...」

「でしょ。だから、緊張しすぎないことを心がけるのです」

「あと、褒める時は自然に！急に大げさに褒めると練習しました感丸出しになるのです！」

「まつりさんの今日の服、めちやくちや似合ってます！」

「すごい練習した感出てるのです！丸出しなのです！」

「え〜難しいですよ〜！」

「でも、気持ちは悪くはなかったのです」

vol.3

「今の褒めは何点ですか？」

「六十五点」

「え〜？」

「伸びしろ込みなのです」

「でもまつりさん、ちょっと嬉しそうですね？」

「そんな事ないのですよ？」

翼ちゃんはくすくす笑って、それから椅子を引いた。

「あ、ちょっとエチケツタイム行ってきま〜す。戻ってきたら第二部ですね」

「なんの第二部なのですか？」

「実践編の？」

「それはまだ早いのです」

「行ってきまーす」

まつりは翼の背中を見送りながら、アイ스티ーを一口飲んだ。

vol.4

「お待たせしました～」

戻って来た翼ちゃんは髪が少し整っていた。唇には、さっきよりほんの少し色が乗っていた。

「……あれ、そっち？」

「はい」

「元の席、向こうだけど」

「知ってます」

「知ってて座ったの？」

「はい。まつりさんのアドバイス通りに」

「私、隣に座れとは言ってな「距離感が大事って言ってました。対面だと面接っぽって」

「言ったけど」

「なので、実践で～す♡」

「改善が早い」

翼ちゃんは満足そうに笑い、メニューをまつりの方へ寄せた。肩が少し触れた。

vol.5

店員が水を注ぎに来て、二人を見て微笑んだ。

「ご注文お決まりですか？」

「あ、はい。レモンタルトと桃のパフェをお願いしま～す」

「お取り分け用のお皿もお持ちしましょうか？」

「えっ」「あ、お願いします」

先に答えたのは翼ちゃんだった。

「…シェアする流れになったね」

「デートっぽいですよね～」

「それはずるいのです」

「練習、ですからね♡」

「本当に便利な言葉なのです」

「まつりさんも一口食べますか？」

「初デートで一口交換は相手によっては攻めてるのです」

「じゃあこれは二回目のデート練習！です」